

京都大学大学院 人間・環境学研究科

文化財に関する高等教育は、これまで考古学・建築史学・文献史学・庭園史学・美術史学、あるいは理科系の関連分野など、大学における各教育部門によって個別におこなわれてきた。しかし、文化財の調査研究者を育成するためには、各専門分野の枠を超えた学際的な研究、文化財の実物にじかに接した調査・観察や分析をとまなう教育がますます必要になっている。文化財学の類の大学教育課程が新設され始めたのは、そうした動向を反映しているが、文化財に関する教育の場としてはまだ一部に限られており不十分である、という現状にある。

そうしたなかで、当研究所も、文化財行政に資する研究機関として埋蔵文化財、建造物、文献史料、庭園などの調査研究を推進しながら、その成果を学生らに習得させる活動を一部でおこなってきた。しかし、文化財の高等教育に対する近年の社会的要請の高まりに応じ、教育機能を充実させることも急務の課題となっていた。そこで1994年、京都大学に大学院人間・環境学研究科が設置されるのを機会に、文化・地域環境学専攻の環境保全発展論講座の客員分野を京都国立博物館とともに担当することになったのである。1997年4月現在、奈文研からは6名が客員教授・助教授に併任され、住環境保全論（山中敏史・浅川滋男）、考古環境学論（町田章）、文化財保存科学論（沢田正昭）、文化財保存調査方法論（光谷拓実・松井章）、の各講義・演習・実習を担当している。

講義や演習の内容は次のとおりである。山中；日本歴史考古学の分野から、日本古代の遺跡の分析を通じて、律令国家の歴史的特質や各地域の諸環境と国家による地方支配との関わりについて考察する。浅川；民族・考古・建築史学の分野から、日本およびアジア諸地域の歴史的居住環境の現状を把握し、その保全の実態と方向性を論じる。町田；中国考古学の分野から、洛陽永寧寺の発掘調査報告書を取り上げ、中国における発掘・遺跡の保存について検討する。沢田；文化財保存科学の分野から、文化財資料の理化学的分析・保存修復に関する研究のあり方を論じる。光谷；木材組織学・年輪年代学の分野か

ら、出土木材の樹種同定、年輪年代測定作業を通じて、考古学との共同研究を推進するとともに、古環境復元をおこなう。松井；環境考古学の分野から、動物遺体・土壌分析に関する研究書の講読や資料分析により、人間の生活・環境を復元する。講義は、各自原則として週一回京大でおこない、他講座の学生も受講している。演習・実習などは主に当研究所などでおこなっている。実習としては、平城宮・藤原宮などの発掘調査や遺物の整理、アジア少数民族住居などの現地調査、全国各地の文化財資料の理化学分析や保存修復、樹種同定や年輪測定、自然遺物などの採取や種の同定作業などをおこなっている。

入学希望者はあらかじめ志望する指導教官を決めて、前期または後期の試験を受ける方式となっている。奈文研客員分野の学生定数は各学年2名であり、毎年数名が入学している。1997年4月現在の学生数は、山中；修士課程2年1人、浅川；研究生1人、町田；博士課程1年1人、修士課程1・2年各1人、研究生1人、沢田；博士課程2年1人、修士課程1・2年各1人、松井；博士課程2年1人、修士課程2年2人、修士課程1年1人、である。研究生はいずれも留学生である。修士論文の作成などにおいては、現状では各教官が自分の所に志望してきた学生をそれぞれ個別に指導するシステムになっている。そのため、担当授業科目名と実際の授業内容との隔たりや教官の専門分野の違いなどによって学生にとまどいが生じないように、できるだけ受験以前あるいは入学以前に志望学生と教官との意志疎通を図るよう心がけている。今後もそうした場を設けることが必要であろう。

この大学院教育が始まって3年を過ぎ、学生数も増え、奈文研における文化財教育の役割は増大している。そして、実際の資料に接した教育の必要上、奈文研客員分野の学生は修学期間の大半を当研究所内で過ごすことになる。そうした実態を踏まえ、教育効果を高めるためには、今後、学生を快く受け入れる体制が研究所全体としてハード面でもソフト面でも十分整備されることが望まれる。また、奈文研の各研究員が、学生のニーズに応え、各自の専門分野を活かし相互に補完しあいながら教育にあたれるとすれば、当研究所で文化財の高等教育を実施する大きなメリットとなると思われ、そうした体制づくりも必要であろう。

（山中敏史）